第 50 回全国壮年大会特別授業（2015 年 8 月 22 日）
「バルト神学の同時代人性――三つの講演と一つの往復書簡から――」（天野　有）

序）

「同時代人性（Zeitgenossenschaft）の問い：私はそもそもいかにして同時代人性を獲得するのか」。

「私が単にここに〈いる〉のではなく、現在にあって、現在の人間に到達し時代の核心に触れるために一人の現実の同時代人（Zeitgenosse）であること、そのようなことへと、どのようにして私は突破するのでしょうか。この観点の下でバルトの思惟を見、そしてその思惟の同時代人性――これは私見によればバルトの思惟に繰り返し繰り返し与えられていたものですが――の秘密を問うなら、両者の繋がりは私には単純なもののように思われます。つまり、まさしくキリスト論的集中こそが――決定的に重要であるものを中心として注目すること――、それに比例して、同時代人性をそれ自身の内から引き出すのだ、と。神学的に中心に向かって思惟すればするほど、それだけいよいよ時代は射抜かれる、との規則が妥当します。そしてそれは、《現実の同時代人性とは、もちろん、イエス・キリストとの同時代人性である》ということに基づいているのです。私たちは、――バルトにとっては――イエス・キリストの同時代人なのです。その点において、私たちは自らの人間的規定を満たしているのです。――これが、バルトにおいては神学の中心的内容です」（ミヒャエル・トロヴィッチュ。ドイツ・エムデンでの「カール・バルトの著作に関する第二回国際シンポジウム――ヨーロッパの〈時代の出来事〉（1935－1950）におけるカール・バルト――抵抗・実証・方向づけ――」での 2008 年 5 月 8 日の最終討論での発言）。(M. Beintker/C. Link/M.Trowitzsch(Hg.), Karl Barth im europäischen Zeitgeschehen (1935-1950). Widerstand-Bewährung-Orientierung, Theologischer Verlag Zürich 2010, S. 505）

A. イエス・キリストと同時代人であること――〈時代の出来事〉のただ中で――

（a）講演「今日の〈時代の出来事〉におけるキリスト教会の約束と責任」（一九四四年七月二三日）――ドイツの罪責・十字架――

→テキスト（pp.1-2）

（b）講演「ドイツ人とわれわれ」（一九四五年一月二一日、二七日、二月八日）――イエス・キリストのドイツ人への呼びかけ（マタイ 11：28）――

→テキスト（pp.2-5）

B. イエス・キリストと同時代人であること――政治的責任と聖霊（ガイスト）によって覚醒される（イエス・キリストの霊／息を吸い込む[1]）諸精神（ガイスト）――

（a）フリートレンダーとバルトの往復書簡

→テキスト（pp.6-12）+事前配布テキスト１

Ⅰ．総合的な異議申し立て

（一）ドイツ国民は一人残らず間違った列車に乗車してしまった。

（二）九九％の「通常のドイツ国民」は《政治的にかくも無責任に生きてきた》という点に自らの罪責を洞察し、明日に向かって将来のための責任を引き受けるべきである。

Ⅱ．個別の異議申し立て

(1)「犯罪」（オラドゥール等々）へと至った道をすべてのドイツ人が歩んだ。

(2)「アメリカの類例」の破綻

(3)「真の犯罪者（非人間的な者たち）」の存在を正当化する論理の破綻

(4)「九九％の通常の者たち」にこそ責任がある。

(5)〈フリードリッヒ－ビスマルク－ヒンデンブルク－ヒトラー〉という線の正しさ

(6) ドイツ国民に欠けていたもの：市民的健全さと成熟さ

総括：《ドイツ国民は、自らの政治的無責任性に対するまさにその責任をこそ意識すべきであり、数百年来その手に墜ちていた体制（システム）と訣別すべきである》

（b）講演「戦後の新建設のための精神的諸前提」（一九四五年五月八日）

→テキスト（pp.13-28）

（一）いかなる精神においてわれわれは戦後の時代を（社会において・日常的に）新しく生きるつもりなのか

（二）責任に生きる精神

（三）人間的精神

（四）連帯的精神

（五）建設的精神

（六）醒めた精神（スポーツマンシップ）

（結び）「戦後の新建設のための精神的諸前提」の前提そのもの――神の言葉（イエス・キリスト！）の聴き手としての人間精神――

[1] 『バルト・セレクション５』550-551 頁参照。